

4) ヌルデ＝白膠木

ヌルデはウルシ科の落葉小高木で、北海道から沖縄まで日本各地の山野に生え、朝鮮半島、中国、東南アジアにも広く分布する。高さは5mほどになり、葉は奇数羽状複葉で、葉軸には翼がある。雌雄異株で夏季に枝先に円錐花序を出し、黄白色の小花を密集してつける。小さい扁円形の核果の表面は赤紫色で、熟すると塩辛い白粉を生じ、葉にはヌルデシロアブラムシの仲間が発生する。この虫が寄生するとその刺激によって、周辺組織が突出し、やがてアブラムシをも包み込んで、これが虫瘤(ムシコブ)となる。虫瘤は次第に大きくなり10月上旬には長さ8cm、幅6cmほどの袋状となるが、これを熱湯に漬けて中の虫を殺し乾燥させたものが、五倍子(ゴバイシ)または附子(フシ)というもので、タンニンをとる原料となる。和名の起りは木から白い液が採取され、塗物に利用できるためとか、白膠(ハクコウ)があるのでヌレデ(滑出)の意味とか、膠(ニカワ)があり手に付くところから、「塗る手」が転じたもの、などの諸説がある。別称もまた多くフシノキ、カチノキ、カツキ、カツンボなど『勝』という言葉が多く見られる。これは軍陣で、大將が指揮をするときに用いた「采配」(サイハイ＝采幣とも記す)の柄として、広く用いられたためである。学名は『*Rhus javanica*』で、種小辞は「ジャワの」という意味である。

ヌルデの紅葉は、ヌルデモミジとって昔から和歌に詠まれてきた。藤原基俊はむかし見し道たずぬれどなかりけり ぬるでまじりのみなふし原という歌を残している。昔見たヌルデの紅葉の美しさを、もう一度訪ねてみたけれども、ヌルデの紅葉を見ることができなかつたというもので、「附子」と「ふし原」をかけているが、当時からヌルデの紅葉の美しさは広く注目されていたのだろう。

五倍子から取れるタンニンは、主に薬用、染料、インク製造などに用いられ、昔は「お歯黒」にも利用されていた。生薬名は『五倍子』(ゴバイシ)で、粉末は口内の腫物や歯痛、切り傷などの治療に、煎汁は下痢や脱肛、痔、出血、咳止めなどにも用いられた。またヌルデの果実にはカリウム塩が含まれ、かつては塩の代用として用いられることもあった。台湾のツオウ族はつい戦前まで、これを塩がわりに用いていたという。真言宗ではヌルデを護摩木に用いていた。これはインドで護摩木として用いたインド菩提樹が、傷つけると白い乳液を出すところから、ヌルデの白っぽい樹液との間に連想が働き、インド菩提樹の代替樹になったものである。

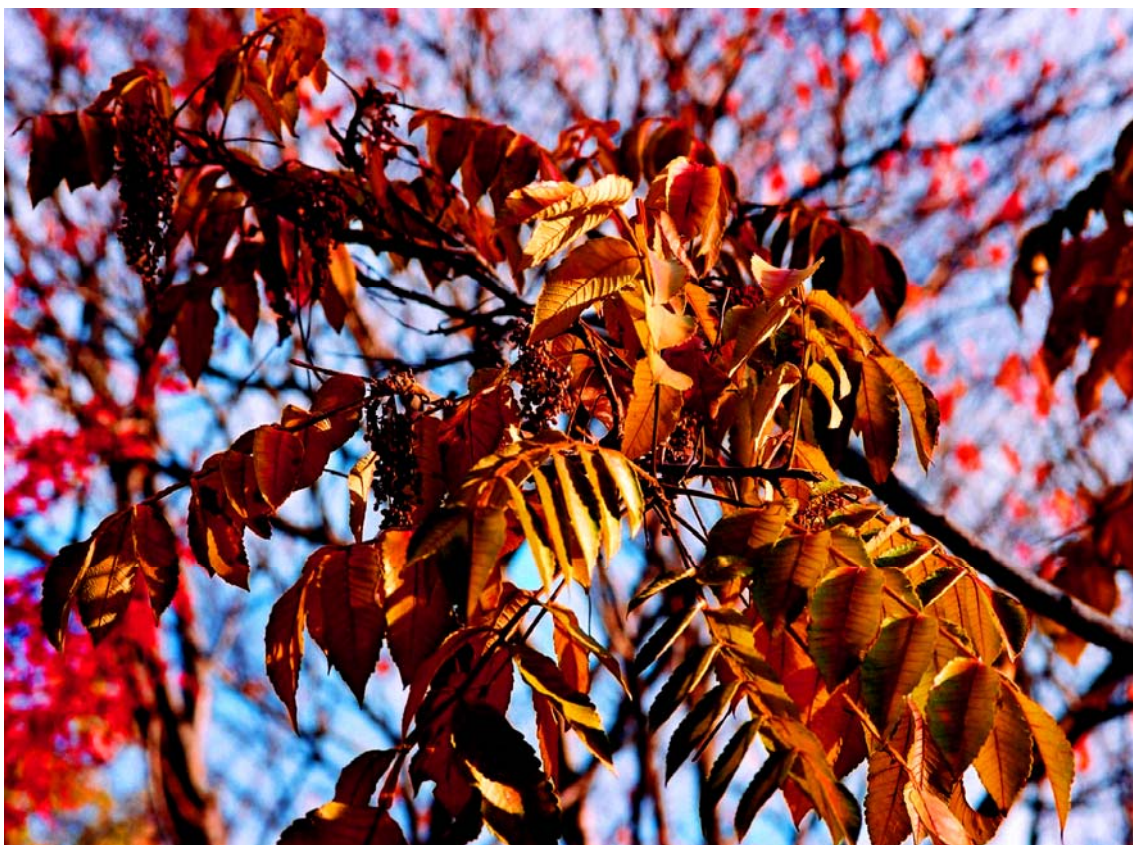
関東地方では小正月に立てられた『おっかど棒』には、しばしばこのヌルデが用いられた。オッカドとはヌルデの別称の一つであり、この木で作った小正月の飾り物をおっかど棒といたのである。同じく小正月に飾り縄を取り払った後に、邪気を払い福を招き入れる呪として、門戸にかけた『削掛け』にもヌルデを用いた。中国では正月に桃の枝を門に掲げる風習があったが、当時は日本には桃は一般的な植物ではなかつたところから、ヌルデがその代役を果たしたといわれている。



ヌルデの花穂、ヌルデは葉に翼が出るためにすぐに判別できる(埼玉県嵐山町)。



ヌルデの果実(群馬県下仁田町神津牧場)。



ヌルデの紅葉と実った種子(大阪府箕面市)。



ヌルデの紅葉と熟した果実(大阪府箕面市)。

[目次に戻る](#)